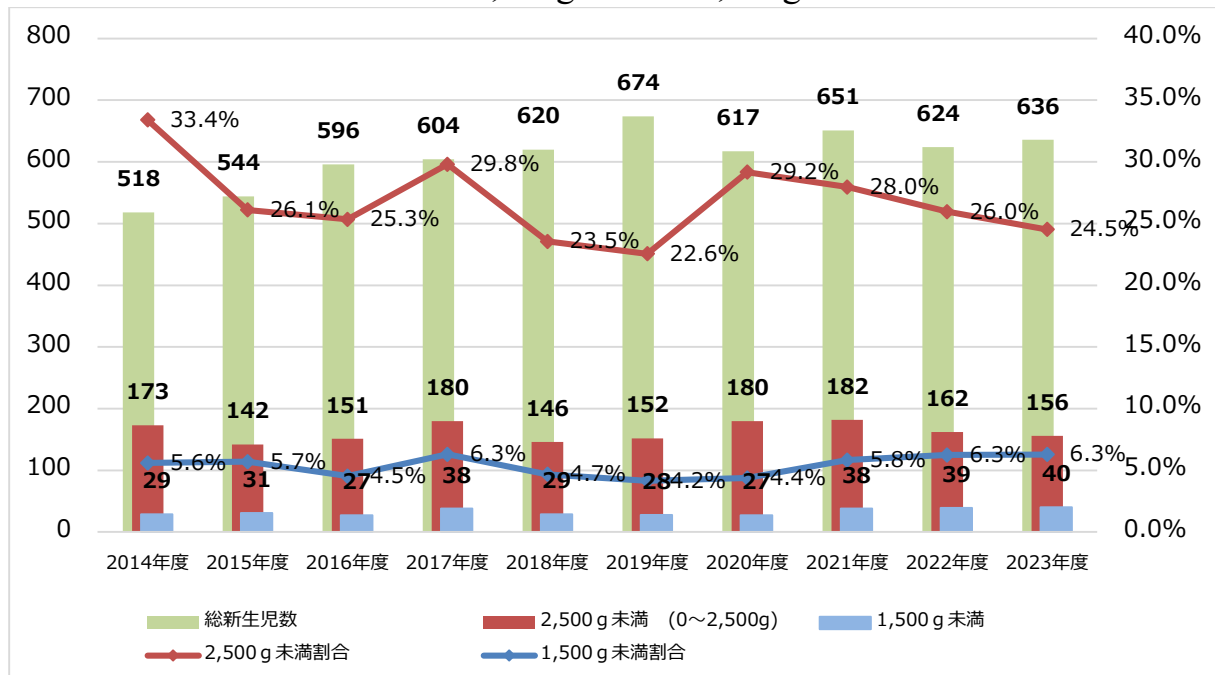


新生児のうち、出生体重が 1,500g 未満、2,500g 未満の割合



当院は、高次機能病院の総合周産期母子医療センターであり、早産や胎児発育異常例の取り扱いが多いことから、低出生体重児の出生数及び出生率は、一般の分娩取扱施設に比して高く、出生体重が 1,500g 未満、2,500g 未満の割合は、2014 年以降、前者が 5.6～6.3%、後者が 22.6～33.4%であった。その間、総分娩数は若干増加をみたが、低出生体重児の出生数及び出生率ともに概ね横ばいと言える。ただし、2500g 未満の出生児の割合は 2020 年度の 29%から 2023 年度は 24.5%へと漸減しており、その要因として当院での多胎出産件数の一時的減少も挙げられるが、同時に 1,500g 未満の出生児の割合は、医療レベルが向上しているにも関わらず若干増加傾向にあり、より重症例を受け入れて対応している可能性も考えられる。

データ提供 看護部 B-3 病棟 (産科)